

◇曹洞宗大本山總持寺二祖峨山韶碩禪師六五〇回大遠忌について

曹洞宗は福井県越前の永平寺と横浜市鶴見区の總持寺が両本山となります。永平寺では、道元禪師が御開山様、その法を継いだ懷奘禪師が二祖となります。總持寺では、瑩山禪師が御開山様、その法を継いだ峨山禪師が二祖となります。宗門ではこの四名の祖師方の遠忌（回忌）供養を大遠忌とし、五十年ごとに大法要を厳修しております。

平成十四年には永平寺で道元禪師の七五〇大遠忌が執り行われました。善光寺でも先代住職が、焼香師として永平寺法堂にて導師を勤め報恩のご供養をされた事は『成寿』三十四巻にご報告の通りです。来年は、大本山總持寺、二祖峨山韶碩禪師の六五〇回大遠忌となります。大本山總持寺では、平成三十六年の瑩山禪師の七〇〇回大遠忌と併せてテーマを「相承く大いなる足音が聞こえますか」とし、様々な記念事業や諸堂の整備が執り行われております。善光寺からも皆様の尊い淨財より懇志を寄せさせて頂きました。

此の機会に大本山總持寺に参拝し、脈々と仏法を繋いでこられた祖師がたに感謝の念を申し上げます、檀信徒皆さま各家のご先祖さま、そして善光寺先代住職黒田武志大和尚に報恩の誠を捧げたく参拝を企画しております。

予定日は、平成二十七年九月二十九日（火）です。詳細については改めて通知申し上げます。どうぞ、皆さまと一緒に参拝致しましょう。

曹洞宗教団を大きく発展させた禅師

徳善寺住職 尾崎 正善

峨山禅師とは

来年、平成二十七年、總持寺二祖、峨山がさん韶じょう碩せき禅師（一二七六〜一三六六）の六五〇回大遠忌が執り行われます。それに因んで、道元どうげん禅師から瑩山けいざん禅師、そして峨山禅師へと相承そうじょうされた教えと曹洞宗の展開について述べたいと思います。

まず、峨山禅師という御名前は、余り聞いたことがないかと思われます。曹洞宗そうとうしゅうでは、中国から正伝の仏法、禅の教えを伝え、永平寺えいへいじを開かれた道元禅師と、總持寺そうじじを開き曹洞宗が全国

に展開する基を築かれた瑩山禅師のお二人を、「両祖」として顕彰しています。

それぞれのお弟子に、永平寺二世としてその護持に務められた懷奘えいじょう禅師、總持寺二世として曹洞宗教団の発展を大きく進められた峨山禅師がおられるのです。

峨山禅師の業績は、瑩山禅師のお弟子として總持寺の護持発展に尽くし、多くの弟子を育て、その弟子達が全国に曹洞宗を広めるように指導をされたのです。

鎌倉新仏教と呼ばれる各宗の祖師は、強い宗

派意識や教団を作る意識は、低かったと言われている。各宗の歴史を見ると、教団としての基盤を固め、全国展開に努めたのは、「中興の祖」と呼ばれる方です。曹洞宗でそうした位置に居られるのが、峨山禪師なのです。

峨山禪師の御生涯

さて、峨山禪師は、建治二年（一二七六）、現在の石川県河北郡津幡町に生まれました。

十六歳の正応四年（一二九一）、叡山に登り修行を行いました。このように叡山で学んだのは、道元禪師・瑩山禪師を始め鎌倉諸宗の祖と同じです。

二十二歳の冬、瑩山禪師に京都で相見しました。両者は親しく問答を行ったのですが、峨山禪師は瑩山禪師の真意を悟ることができませんでした。縁かなわず別れたのです。

それから二年後の正安元年（一二九九）春、

再び金沢の大乗寺に瑩山禪師を訪ね、衣を改め曹洞宗に入門しました。そして、二年の修行を終た二十六歳の十二月二十三日、悟りを開き、瑩山禪師の印可を受けたのでした。その後、徳治元年（一三〇六）三十一歳で、瑩山禪師の命により、諸法遍歴の途に着きます。

元亨元年（一三二一）七月二十二日、瑩山禪師は、定賢律師より諸嶽寺観音堂を寄進されました。寺の名を諸嶽山總持寺と改め、造営に着手したのですが、峨山禪師は、師の側らにあつてその補佐に務められました。三年後の正中元年（一三二四）五月二十九日、總持寺の僧堂開単式を行い、七月七日に峨山禪師は、瑩山禪師より總持寺住職を譲られました。

これより以後、貞治五年（一二三六）に九十一歳で亡くなるまでの四十二年の長きにわたり、總持寺の護持発展、弟子の育成に尽力したのでした。



總持寺 大祖堂（右）と佛殿（左）

峨山禪師の弟子達

峨山禪師は、晩年に弟子を記録した『嗣しほうし法次第』を書かれました。その中には、二十八名の主要な弟子が記されています。さらにその中、十一名の弟子が二十五もの寺院を開いています。その地域は、北は東北・岩手、南は九州・鹿児島まで広範囲にわたります。石川・富山・福井という北陸地域が多いのは事実ですが、曹洞宗が全国展開する基礎を築いたことは間違いないかもしれません。さらに孫弟子の代まで含め、その活動の実際を示したならば、とても語り尽くせません。

さて、このような多くの弟子は、ただ待っていれば集まって来るといふものではありません。また、集まった弟子達に対して、それぞれの能力に合わせた細やかな指導も必要だったでしょう。峨山禪師の名声と共に、その指導力が高かったことが想像できます。

瑩山禪師が、衆生・済度・女人・救済の誓願を立てられたことは、『洞谷記』という書物に記録されています。こうした思い、坐禅を修行の基とし自己を研鑽し、さらにその修行力を入々のために振り向け実践することが、峨山禪師へと受け継がれたのでした。それは、授戒会や祈祷儀礼、葬祭儀礼等に現れています。そして、その教えはさらに、弟子達へと受け継がれ、全国に伝えられたのでした。

峨山禪師の功績

峨山禪師の足跡を顕彰するならば、第一に挙げるべきは、弟子の育成、指導という点です。禪師は、「二十五哲」と呼ばれる多くの弟子を育てました。これは、曹洞宗の歴史の中でも特筆すべき人数です。特に日本曹洞宗教団初期の段階では、最初の禪者といえます。

さらに、多くの弟子達が、広く全国に赴いた

結果、現在の曹洞宗寺院の多くが、峨山禪師の弟子・孫弟子、さらにそれに連なる系統によって開創されているのです。

第二点は、その門弟が協力して總持寺を維持・発展させるため、住職を一定期間で交代させる「輪住制」を確立したことです。そうした住職交代制度は、協力して寺院を守って行くと共に、多くの優秀な人材を生み出す原動力となったのです。

さらに、その法孫の拠点寺院においても輪住制が採用されました。例えば、神奈川県南足柄市の大雄山最乗寺がそうでした。こうした寺院がそれぞれの地域の要となり、弟子を育て、さらに新寺を建立し、民衆の接化に努めた結果が、現在の曹洞宗を形作っているのです。

三点目は、時代に則した教化・布教ということです。坐禅修行を根幹に弟子達に正伝の仏法を説き示しましたが、同時に多くの人々にも仏

法を広められました。その具体的な例として、
 總持寺に入られた直後に授戒会を行っていま
 す。授戒会は、仏戒を授かる法要です。これは、
 仏さまとのご縁を結ぶ重要な意味を持っていま
 す。日頃、生活に追われる庶民にとって、修行
 を実践することは至難です。そうした中、授戒
 を通して仏法に触れ、後生ごしやうへの結縁けちえんを得ること
 は、多くの人々の救いへと繋がったのです。

だいはんにやてんどうく
 大般若転読だいはんにやてんどうくの法要も總持寺で始めています。

これは祈祷儀礼ですが、總持寺の安寧を願うと
 同時に、人々の不安を除き、願い叶えることを
 祈念したのです。

現在の曹洞宗の衆生済度の姿勢は、峨山禪師
 の思いを受け継いだものといえます。

このように峨山禪師は、七百年近くも前に「人
 材育成」「教団の運営」「布教教化」に深い想
 いを持ち、それを実践し多くの人々を導いたの
 でした。

